

平成 28 年度第 2 回総合教育会議 議事録

1 開催日時

平成 28 年 10 月 26 日 (水) 16 : 00 ~ 17 : 30

2 出席者

構成員	市 長	園田 裕史
	教 育 長	溝江 宏俊
	教育委員	永田 政信
	教育委員	江口 真由美
	教育委員	渡邊 敬
	教育委員	佐古 順子
	教育委員	村川 一恵

説明者	政 策 監	遠藤 雅己
	教 育 次 長	上野 真澄
	こども未来部長	川下 隆治
	教育総務課長	西村 隆
	学校教育課長	丹野 平三
	学校教育課参事	本多 修司
	教育総務課係長	内野 一嗣

事務局	市 長 公 室 長	大槻 隆
	企画調整課課長補佐	山中 さと子
	企画調整課職員	小林 努

3 協議事項

- 大村市教育大綱「1 人間性を重視した学校教育の推進」について
- (1) 「確かな学力」として大村市が目指すべき方向性について
 - (2) 「心の教育の充実」について
 - (3) その他

4 経過

市長公室長 大槻 隆

定刻となりましたので、ただいまから平成 28 年度第 2 回総合教育会議を開催いたします。

私は、本日の司会を務めます大村市市長公室長の大槻でございます。どうぞよろしくお願い致します。

まず、お手元の資料のご確認をお願いいたします。次第、資料 1 の出席者名簿、資料 2 の配席図、資料 3 が非公表となっておりますが、平成 28 年度全国学力・学習状況調査結果等、補足資料として「学びネット定期便」、となっております。不足等ございましたら挙手をお願いいたします。

それでは、早速、次第に沿って進めて参りたいと思います。開会に当たりまして大村市長園田裕史がご挨拶を申し上げます。

大村市長 園田 裕史

皆様、こんにちは。本日も大変お忙しい中にお集まりいただきまして、ありがとうございます。また、日頃から大村市の教育行政に対しまして、多大なるご理解とご尽力をいただきまして、誠にありがとうございます。本日もまた、傍聴の方も多く来ていただきましてありがとうございます。

前回の総合教育会議からしばらく期間が空きましたが、その間、私も市長として、一父親として市内のいろんな教育に関する取組に参加をさせていただいております。先般は松原地域で、地域の方々、健全協が中心となって、「みんなの学校」という全国でも話題になった映画の上映会が 1 日 2 回上映されて、2 回とも満員で参加をされて、私も全部観させていただきましたが、非常に素晴らしい映画でございました。地域の方々の協力で、学校だけに負担を負わせるのではなくて、協力することでその地域の学校も、子ども達の成長も育まれたという内容で、「素敵だな」ということを感じた次第です。こういう取組が、松原という地域での上映会でしたが、市内全域から集まっていた

いただきましたし、また市内全域に広がっていくと素晴らしいと感じた次第です。

また、大村市学童保育連合会というところが、スマホサミットという形で立命館大学の竹内教授という方をお招きをされて、市内のスマホの子ども達の状況はどうなんだという形で、ワークショップ形式でされていまして。実はその数字が、大村市内のスマホの所持率がすごく高いということと、スマホを使ってメディアに触れている時間が全国的に見ても極めて高い数字だったという報告もあり、そういう状況もあるのかということ非常に学びになりました。実際子ども達が参加したワークショップだったので、子ども達の中でも気づきがあったのではないかなと思いました。

今日の資料の中にもありますが、学力調査が公表されまして、本当に皆様のご尽力のおかげで若干改善をしてきております。他市、特に長与町が改善の結果がすばらしかったということがありますが、他市の取組等々の情報を入れていくことで、どういう取組が有効なのか、地域の特殊性、大村市が置かれている状況とかも見えてくると思いますので、そういった内容も教育委員会の方でも協議をしていただければと思っております。

また本日は、午前中に長崎県立私立幼稚園 P T A 連合会研修大会というものがあまして、講師が創成館高等学校の奥田理事長でした。私は個人的にも興味を持っている教育者、経営者ということもあって、午前の部の講演などを聴かせていただきました。キャラクターもさることながら、カリスマ性もあられるのですが、非常に興味深いもので親御さんがああいう気づき、アプローチを積み重ねていくことが、家庭教育の一つになっていくということを感じました。

また、教育関係者の方からも色んなご提案等もいただいておりますので、是非大村市の教育に対する思いとか熱とか非常に高いと思いますので、是非皆様からご協力をいただきながら、高い見識の中で協議をいただいて、一つずつ形にできれば

など思っておりますので、本日もどうぞよろしく
お願いいたします。

最後に一つご報告ですが、大村市PTA連合会
から広報誌が発行されております。PTA連合会
が発行しているものですので、9000部が市内の小
中学生のご家庭に届いています。うちも小学生と
中学生がいますから2部届きました。

ページを開いていただいて2ページ目に、中学
校給食がいよいよ始まりますよという形で特集を
組んでいただいております。これは前からある
ことですが、実際に子ども達に「給食がいい？」
「弁当がいい？」と聞いたら、うちの近所の子
ども達も「市長、給食じゃなくて弁当が良かばい。」
と言います。それだけお母さん方が協力して
いただいていることに対して本当にありがたいと思
います。

ただ、今回アンケートがまとめられたのは、先
行実施が始まる萱瀬中学校と玖島中学校の児童生
徒と保護者に対するアンケートでした。全校では
ありません。その中で、7割弱の子ども達が「弁
当がいい」という結果出ていました。これはあく
まで子どもです。

保護者は当然これまでの長い経過の中で、働く
環境が整い、就労をされているお母さん方も多い
し、給食に対する期待の高まりもあって、確実に
昨年10月に行った教育委員会のアンケート調査
の中で、給食を希望されているという保護者の方
の優位性が出ています。それをもって教育委員会
において、給食を皆様にも協議をしていただいて
進めている部分もあります。もしかしたら、この
新聞の反響が色々な形で、実は「給食じゃなくて
弁当がいいんじゃないの」ということがあるかも
しれませんが、これはあくまで子ども達が「弁
当がいい」「給食がいい」「弁当おいしかなあ」「お母
さんありがとう」という部分でのまとめになって
いますので、保護者また、教育委員会でこれまで
ご議論いただいたことが決して保護者に理解され
ていないということではありませんので、そのこ

とは正式に私も大村市PTA連合会にちゃんとお
伝えをして、ちょっと偏ったような理解にならな
いように編集には心掛けていただきたいなあ、と
いうことをお伝えをしようと思っております。も
しご覧になられたら、その部分をご理解いただ
いて読んでいただくと非常にありがたく思います。

本日もどうぞよろしくお願いいたします。いつ
もありがとうございます。

市長公室長 大槻 隆

ありがとうございます。次に、次第「3 報告」
に移ります。「学期制検討タイムスケジュール」に
ついて教育委員会から説明をいたします。

学校教育課参事 本多 修司

学期制検討タイムスケジュールの資料をご覧
ください。下の方からご覧いただいた方が分かりや
すいと思います。29年度3月の「平成32年度か
らの学期制決定」、ここで2学期制で行くのか3
学期制で行くのかということを決めます。その
ために29年度中に学期制検討委員会を立ち上げ
て、色々な立場からご議論をしていただく、その
ための資料としてアンケートを作成して実施をす
るということでございます。28年10月をご覧
いただきますと、「アンケート素案の検討」とありま
す。これは保護者や教職員を対象としたアンケー
トの中身を検討しているところでございます。こ
のようなスケジュールで進めて参りますというこ
とを、教育委員会の方で決めました。以上でござ
います。

市長公室長 大槻 隆

ありがとうございました。次に、次第「4 協
議」に移ります。ここからの進行は、大村市総合
教育会議運営要領に従い市長が行います。園田市
長、よろしくお願いいたします。

大村市長 園田 裕史

それでは、協議の第一でございます。お手元
にあります資料に、大村市教育大綱「1 人間性を
重視した学校教育の推進」についてとございま
す。本日は、まずこの大きな教育大綱の中に示されて

いる内容を皆様でご議論を深めていただいて協議していきたくと思います。

最初に読みます。

1, 人間性を重視した学校教育の推進

子どもたちの可能性を最大限に伸ばし、将来の大村市を担う人材を育成するため、教育内容の充実、家庭や地域との連携による特色ある教育を進め、心の教育の充実や確かな学力の定着を図るとともに、個性や創造力の育成に努めます。

この中でまずは協議事項(1)「確かな学力」として大村市が目指すべき方向性について、学力調査をもとにご議論をいただきたいと思います。まずは、学力調査について教育委員会からご説明をお願いします。

学校教育課長 丹野 平三

平成28年度全国学力・学習状況調査の資料をご覧ください。1枚目と2枚目につきましては、来月11月下旬に広報おおむらの12月号に掲載する予定の内容になっておりますこととお断りしておきたいと思います。

1枚目の上段をご覧ください。全国学力・学習状況調査につきましては、児童生徒の教育指導の充実と学習状況の改善に役立てることを目的に平成19年度から始まったものでございます。今年度で10年目を迎えております。本市の小中学校におきましても、学力検証の一つとして活用しているところでございます。

毎年4月、対象は小学校6年生と中学校3年生で実施しております。今年度の実施状況はそこに明記してあるとおりでございます。尚、調査内容といたしましては、小学校においては国語と算数、中学校においては国語と数学、3年に1度理科も実施しております。今年度は理科の実施年度ではございませんでしたので、国語と算数、数学となっております。

調査問題は大きくA、Bの問題に分かれており

ます。A問題というのは、その学年までに学習した内容、つまり小学校6年生、中学校3年生の4月の段階までに身につけておかなければならない基礎的な知識や技能を問う問題で構成されております。B問題はそれらの知識や技能を活用して、生活場面や実際の様々な場面で活用する力、いわゆる思考力や判断力、表現力を診るような問題となっております。

そのような調査を行っており、今年度の結果は右の表をご覧ください。大村市においては、先ほど市長の方からもありましたように、小学校のA問題については全国と同等、もしくは若干上回る結果が出ております。ただ、他の分野については、全国比と比較して、1ポイント~3ポイント程下回っている現状でございますが、他年度の状況から見た時に今年度は大きく全国との差も縮まっていると思っております。各校においても授業改善が進んでいる状況が見て取れると思っております。

ただ、そのような問題においてどこが課題かということを整理したものが、その下の表の国語と算数、数学の教科毎の欄に分けたものです。○は効果が見られるところ、▲はそういう問題に子ども達がやや苦手意識を持っているところと捉えていただければと思います。

さらに、めくっていただいて、資料の3枚目をご覧ください。A問題、B問題の学習の調査と合わせて質問紙調査というものを児童生徒に行っておりまして、学習状況や家庭の生活状況を85項目に分けて調査がなされております。その中から、授業以外に1時間以上学習していますかという問いかけに対して、本市の子ども達の現状、過去3年間を小学校と中学校に分けているのが、その表になります。

ご覧いただいてわかるように、若干小学校で今年度の結果として学習時間を確保していない子ども達の割合が多くなっているところが見受けられます。それと、テレビやビデオ、DVDの視聴時間が2時間以上の子ども達の割合が全国比に比べ

て+6.6ポイントということで、小学校で多くなっているということは、そういう時間に勉強時間が取られているのではないかと推察できるようなデータとなっております。

そのほか、6番、7番、8番の項目は国語の授業が分かるか、算数・数学の授業が分かるかという問いかけのところもございます。これについては、国語で中学生が-7.2ポイントということで、この辺りが学習状況の結果にも現れているのではないかと分析をしているところで、子ども達が興味を持つような授業づくりをさらに各学校現場で改善を図っていかねばと思っているところでございます。

このような現状をそれぞれの学校でも分析を行い、授業改善に活かしておりますけれども、市の教育委員会として今年度行った対策について説明をいたします。

資料2枚目をご覧ください。このような学力調査の結果を受けて、各学校現場の先生方と授業改善に向けた取組を行っておりますが、昨年度から全ての教職員を対象として小中学校合同の学力向上研修会、教育実践研究集会というものを開催しております。この中で、当市の学力の課題の共有や、導入をしておりますデジタル教科書や実物投影機等のICT機器を活用した授業づくり、今年度は福井県の方に先進地視察を行いましたので、その概要等について報告を行ったところでございます。その際に参加した教職員の感想を一部抜粋で載せております。

下段にはそれぞれの授業改善の先生方の取組をさらに支援するためにお手元にカラー版のリーフレットを差し上げておりますけれども、このような授業改善に向けた先生方の学習規律や一時間の授業づくりの流れについてのポイントをまとめた資料を配布するなどして、先生方の日々の授業を側面からも支援する取組を行っているところでございます。以上、学力向上についての現状と対策等をご説明申し上げます。

大村市長 園田 裕史

はい、ありがとうございます。それでは、全国学力状況調査の報告もございましたが、ここについて何でもいいので、今、教育委員として皆様を感じられていること、こういうふうな結果を受けて、またここ最近の取組についてこう感じるとか、学校現場、関係地域等、今感じることや、こういうふうに変わっていったらどうだろうかというような、忌憚のないご意見をお一人ずついただければと思っておりますが、よろしいでしょうか。

教育長 溝江 宏俊

子ども達の状況ですけれども、先ほど担当課長から話がありましたが、全国的には学力は低いです、少しずつ改善しています。中学校では今年少し落ち込んだという状況だと思います。ただ、見られますとおりの生活習慣の方は、正しい生活という面では、地域の行事に参加しているのが極端に少ないということは、何でかなあと思います。大村は新しい人が入ってきてそうなっているのかどうか、その解明が必要ではないかなと思っております。

また、学力学力と言いますが、勉強が全てではない。卒業して行って、本当に生活できる力を付けさせる、それを持って中学校を卒業していく、それが目的であると考えています。ただ、その一番の現れが学力ではないかなと思います。心の面も大事ですが、そう思っています。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。永田委員お願いします。

教育委員 永田 政信

学力・学習状況調査を見させていただきまして、去年よりだいぶ学力の面では改善されたなと思ったところでした。

先ほど学びネットのご紹介がありましたけれども、着実に教育委員会が学校への指導等を行っておりますけれども、その成果がでていっているのではないかなと思っております。

それから、昨日学校を市教委の事務局の先生達

と一緒に訪問させていただきましたが、本当に素晴らしい授業を展開されておりました。日々の先生方の努力の跡が伺えるというふうなところを知ったところでございます。そのように学校現場方では、校内研修とかそういったもので、特にがんばっておられますが、それらに加えて子ども達の力を伸ばしていくということに関しては、家庭の方のお力も必要だし、地域の方からの支援もあれば、さらに大村の中学校の子ども達の力も付いていくのではないかなと思います。具体的にはあとでお話させていただければと思います。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。江口委員お願いします。

教育委員 江口 真由美

うまく話せるかどうかわかりませんが、最終的な目標としては、社会に出て学んだ知識を活かすことができるのか、そういったことになってくると思います。もちろん、学力でこういった数値に現れていることは見逃せはしないのですが、永田先生もおっしゃいましたけれども、私も教育委員にならせていただいて、学校現場に足を運ぶことが多くなり、先生方の努力というものをすごく肌感じます。一番子どもに力を付けさせてあげたいということで、自ら先生方が授業改善をされているのを目の当たりにします。そういうことを学校側から発信することも必要なのでしょうけれども、親がそこに共鳴するという姿勢というのは大事ではないかなということを目頃から思っていて、家庭での子どもの生活ぶりとか、抽象的な言い方ですが愛情のかけ方とか、そういう基本的な生活習慣とか、色んなことがあるかと思いますが、家庭で愛情を注いでほしい、安心感を与えてほしいと思います。家庭で自己肯定感を育ててあげれば、学校で自分も主体的に学ぼうという姿勢や、自分が役に立ちたいということを目頃から思っているような子どもに育つのではないかなと思います。そういう意味では、家庭の安堵感というはすごく大事だなと感じます。

それと、授業改善をされる先生方が疲弊しては子ども達も元気に育たないのではないかなと思っていて、先生方が元気を出される為には、ある程度の余裕とか、熱意を発揮されるような時間的、物理的余裕もそうなのでしょうけども、熱意のあられる先生を支援していきたいな、というのをすごく感じています。

とにかく、保護者対応だったり、子どもの状況を見ながら、日々追われている先生方をどうにか支援していけないかな、プラス、家庭のお父様、お母様方が抱きしめてあげて、愛情をすごく注いであげてくれたらいいなということを目頃から思っています。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。村川委員お願いします。

教育委員 村川 一恵

学校に私達もよく見学に行かせていただきますが、その時、先生方が大変準備を重ねた上での授業になっているので、とても素晴らしいものであるのですが、それ以外に、普段何気なく立ち寄ったときの授業とか、普通の授業参観であったりとか、本当に工夫されていて、先生方の努力が目頃伺えるなと思ったり、本当に感心しているところです。

先ほど江口委員が言われたように、先生達の心の余裕を保つために、学校現場では先生達の補習とか、先生達がどれだけ余裕を持って子ども達に接することができるかという環境を整えて子どもに接していただくというところが、学校の現場ではとても重要になってきているのではないかなと思います。

学力のことですが、心の教育とあるように、学校は勉強を教えるのは当たり前、学校の先生は勉強を教える当たり前。でもそれ以外の大人達がどういうふうに関わるかということが、これからキーになってくるのかなと思います。もちろん、両親は当たり前で、どういう風に子どもが成長しているかとか、愛を持って接することで、もっと余裕を持って勉強するとか、いろんなこと

にチャレンジするとか、そういうことにつながるとは思いますが、またそれ以外の地域の大人がどういふふうに関わるかというのも、今後重要だなど思っています。

先日カメラで行ったワークショップで講師の先生から聞いた事例で、武雄の地域の活動として、地域のおじいちゃん、おばあちゃん達が小学校に行って、朝の4分間とか、宿題を見てあげるとか、勉強を見てあげるとか、そういうことが行われていて、すごく良い成果を上げている。そういう普段だったら勉強と関わらない大人がやってくれてるんだとか、教えてくれてるんだとか、勉強を教える人じゃない人が勉強して大切なんだよとか、そういう現場が子ども達に印象を与えることが強いのではないかなと思います。また、大人になったときにそれが自分も教育者ではないけれども、子どもの教育に関心を持つ手掛かりになるのではないかなと思ったところでした。

学校だけでなく、家庭、地域、そういうところの取組が学力の要になるとは思います。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございました。佐古委員お願いします。

教育委員 佐古 順子

確かな学力ということで、学力・学習状況調査結果を見させていただきました。少しずつ伸びているということをお聞きいたしまして、嬉しく思います。それに伴いまして、先進地視察をなさったりとか、8月18日にさくらホールで全ての教職員を対象にこういった研究集会を開いてくださいますと、とてもいい方向に向かっているなどということを感じました。

それから、西大村中学校と大村小学校の視察に参りましたけれども、学校がチームとして全職員が同じ方向を向いて、一丸となさっているところを見まして、こんなところで働ける職員は幸せだなどと思いますし、そこにいる子ども達も幸せだなど思いました。教頭先生が毎日、子ども達の下駄

箱をチェックしにいくとか、細かいことの積み重ねを見まして、成果が出ているなどということを感じました。

また、これも学力調査の結果なのですが、中学校を訪問した際に、やはり学力調査の問題に触れまして、ただ知識のA問題ではなく、B問題に関しての活用の方で、判断力を養うような同じ様な問題を使われまして、ただ答えを出すというのではなく、それが数字の答えではなく、数字がプラス、数字ではマイナスかもしれないけども、マイナスの部分も生活の中にはそれを使う場合、採用する場合もある。それはどんな場合かというのは、生活の中に密着したような問題で、とても今の時代に合ったものをされており、数学の時間でも今のこの子ども達は幸せだなど思ったり、先生達の努力が伺えるなど感じました。

全職員がどうなったらもっと良くなるかとか、いろんな立場から考えて話をなさっていらっしゃる姿を見まして、優良事例を共有するというのと、足りないものは何かということ洗い出して、その足りない分も共有してまた一緒に考えていらっしゃるということはとても素晴らしいなど思いました。

実践研究集会でどうだったということ、こういう反省文が出ていますが、大きく出してくださいまして、私も勉強させていただきたいなど感じました。細かくあげると切りがないのですが、書画カメラなんか勉強されていて、とても良かったなど感じました。

目配りとか気配りとか言いますがけれども、全職員が同じ方向を向いて一緒になさっていますので、子ども達が担任の先生以外の先生の顔を見ても、心を開いているような目をして、他の先生を見たりとか、感情を見せてるような顔をしていますので、そういうところもただの研修の為に作られた授業というよりは、学校全体が平素からとても素晴らしい活動が行われているということが感じられた視察だったなど思いました、とてもありがた

かったなと思いました。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。渡邊委員お願いします。

教育委員 渡邊 敬

学力・学習状況調査で小学校の方は全国よりプラスになっているということで、頑張っておられる先生方の努力の結果がこういうふうに見れていることで喜ばしいことだと思っています。中学校の方は、私は参観日に行っていないので良く分かりませんが、全国よりは低いものの、学力が上がっているということで、継続していただきたいと思います。それから、ICT といったものを活用されて以前の授業よりもより分かりやすい、繰り返しやすいそういう授業になっているのかなと思いました。以上です。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございました。

私もちょっとだけ言いますと、就任してからすぐ小中学校 21 校全部訪問させていただきました。その時に授業風景も見させていただきまして、委員の皆さまが言われたように、教育長はじめ教育委員会の取組もあって、各学校が一生懸命趣向を凝らして取り組まれているなど感じました。学校によって、ドリルの種類が違ったり、ドリルのやり方が違ったり、置き場所が違ったり、取り組ませ方が違ったり、本当に工夫をしながら各学校やっているなど。もっと言うと、当然ながら学校別の結果も変わってきたりしている。そこはシビアに見てもそういうところもあると思います。ただ、現場の先生方が ICT の新しい機器を使ってという方向も含めて、一生懸命取り組んでいただいているなど感じた次第です。

そんな中で、学力調査がこんなふうに報告がありますので、正直に実際の数値で見えてくるところだと思っています。福井県や秋田県が学力調査の結果が高い。それは例えば、寒いところでエアコンが整備をされているとか、ハードの整備であったり、読書力の高い秋田の学力が影響していると言

われていますが、一体どういうところが大事なのかというのを見ていきたいなと思っています。

いつも思うのですが、「確かな学力」という文言は基本的に文科省もそういう表現をしているんですよね。この「確かな学力」というのは素敵な言葉だなと思って、大村市の大綱の中にもあるし、今後「確かな学力」という形で表していきたい。

では「確かな学力」って何なんだろうと言うときに、こういうふうに単純な点数だけじゃないよということが含まれてると思います。ただ、私が個人的に考える学力とはどうかなと思った時に、数字で学力を表されることって大事だなと思っていて、例えば、「お医者さんになりたい」とするときに、医者になるためには、医学部に合格をしなくてはいけなくて、その時に確かな学力が必要ですよ。市役所の職員もすごく倍率が高くて、この前一次試験が終わりましたが、他にも一次試験は当然ながらペーパーがあり、教員採用試験は本当に倍率が高いです。なりたい職業になるためにその学力が必要なんだよというのは、やはり子ども達も親御さんも意識をしなくてはいけなくて、超えなきゃいけないハードルで、何でご飯を食べていかを考えた時に、大事だというのは、数字が突きつけられるけど意識をしなきゃいけないと思っています。学力について。だから、学力調査結果というのはちゃんとシビアに見ていかないといけないなというのが、自分が思っていることです。

ただ、「確かな学力」という時には、本当に皆様がおっしゃったように、ただそれだけではないよ、というようなことを考えていて、この前西大村中学校の先生も言われていましたが、アメリカの研究者の発表だったと思うのですが、今の子ども達が大人になって就職するときには、今ある職業の 65%が無くなっていて、新しい仕事に就くだろうというとても怖い話で、新しい産業と仕事が生み出されるんだろうなど。だったら、創造性豊かな教育をしていかなきゃいけないんだろうと感じ

た次第です。

そんな中で、皆様からのお話を聞いていく中で、ポイントが3つあるのかなと思います。1つは、色んな大人が教育に関わる、地域教育を充実していくにはどうしたらいいのかなというところがありました。これについては、先ほど冒頭に言った松原、松原だけではないのですが、そういう地域の大人が関わるというのは全域に広がっていった欲しいなというのはあります。今、子ども会の加入率が10年前は50%で今29%になっています。子どもの会の是非は色んな状況が変わってきて、一概に言えないので何とも言えないのですが、だからこそ、それに代わる地域の在り方ができると、非常に地域教育が進んでくるなと思います。退職校長会の先生方がしていただいている放課後子ども教室とか、本当にご尽力いただいています。まずはこの地域教育をどうやって充実させていくことができるかということに、色んなお考えを聞かせていただけないかなというのが1つめです。

2つめが、個性を伸ばすという時に、先ほどの職業選択とか生きる力をと教育長からも言われましたが、アクティブラーニングとよく言われるような取組で、大村市が今できることというのはどういうことがあるのかな、ということ、何かお考えがあれば聞かせていただきたいと思います。

もう1つは、先生の負担軽減というのは本当に大事なことで先生方が疲弊されていることはよく分かりますし、ICT教育を導入していくんだしたら、ICTを導入することで先生方の負担が軽減になるというようなこともあると思います。そこらへんとか、実際に学力を向上していくためには、学校だけじゃなくて、家庭で習慣を付けさせていくことが必要で、家庭での学習状況が変わってくると結果が変わってくるのではないかなと思います。では、家庭にどうやってその促しをしていくことができるのかなということ、ぜひこういうことに取り組んだらどうだろうかということ聞かせていただきたいと思います。いかがでしょ

うか。

先ほど、永田委員から学力調査に対して思うことがあるんだけど、という話があったと思うのですが、もしよろしかったら教えていただければと思います。

教育委員 永田 政信

地域の取組というところで柱が1つ取り上げられました。子ども達の周りには全員が子どもを見ながら、全員が関わればいいのでしょうか、そういう訳にはいきません。出来る人はというふうなところでやっていけばいいかなと思うのですが、私も先ほど市長が言われた放課後子ども教室の一員ですが、中央小学校に通わせていただいております。やはり教室の中では見れない子供の様子が見れていいなと思っています。現在は退職校長会だけでやっていますけれども、これをもっと広がっていけば良いなと思います。本当に学校に協力をしたい方というのは、たくさんおられるのではないかなと思います。放課後だけではなく、授業の中にも入り込んでいいのかなと、学校の先生からは怒られますけども、そういったことも可能なのではないかなというのが1つあります。

今のは人材の活用ですけれども、それ以外にも「場」というのは地域にたくさん転がっているのではないかと思います。例えば、公民館というのは今は社会教育としての施設になっているのかなと、私は疑問に思うところがあります。そういうところの「場」での教育の在り方というのでしょうか、そういうことも考えてみる必要はあるのではないかなと思います。

それから、個性を伸ばす教育ということで、なりたいものというのは一人ずつ違いますよね。だから、子どもの頃に自分はどのようなものになりたいとか、学ぶ意味だとか、学ぶことの大切さということを植え付けるということが大事かなと。そういったものがベースにあって子ども達が広い基礎を作って、高いものをつくっていくのではない

かなと思います。広い経験というのは、高さを作ります。狭いものには高さが出てこない。だから多くのものを子ども達に与えたいなと思います。

たとえば、人を一杯浴びせたいですね。子ども達に人の生き方、たくさん人の生き方を知らしめたい、語っていただきたいと思います。そういった中で子ども達は感動もあるでしょうし、そういったふうなことを刺激にしながら、自分のなりたいものというのがまた新たに見えてくるのではないかなと思います。

先ほども言いましたように、地域の人をもっと活用するという部分があります。地域には、いろんな職業の方がおられますので、そういった方の話を聞かせて子ども達の視野をもっともっと広げていく、そしたら自分はこういう方向に進みたい、ああいう方向に進みたいとかいうふうなものが形作られていくというようなこともあるのではないだろうかなと思います。

それから、教職員の負担軽減については、家庭との共有の目標があったらいいなと思います。学校のあと、学んだことの定着を図るとか、学びの習慣化といったものが家庭で培われると、先生達の授業も案外うまくいくのではないかなと思います。そのあたりのそういうふうな目標の設定、学校と家庭の目標の設定の在り方を1つの課題としてやっていくと何かいいものが見えてくる部分があるのかなと思っています。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。ぜひ今の永田委員のお話を聞きながら、皆様感じられたこととかあればお話をいただきたいのですが。

教育委員 渡邊 敬

今、永田先生が広がりというのは高さをつけると言われたことに感心しまして、うなずいていました。孫がいて、4つぐらいなりたいものがあると言っています。見た経験で関心を示しているようで、消防士救急隊の方に連れて行ったとき、それに感心してから救急隊員になりたいとか、サ

ッカーを見てるからでしょうがサッカーの選手になりたいとか、科学館に行って科学者になりたいとか、最後に私のところにも来るので耳鼻科の先生になりたいとか。そういうことで、色んな経験をさせ、地域の人達、なんかもったいないような気がするので、色んな体験談、お話を聞かせる機会を沢山作ったらどうかなと思います。

また競争というのはまた別だろうと思います。志の部分とは別だと思しますので、裾野を広く、色んな経験をして最終的に何かになるというような子どもが生まれてくると、仕事に対する思いやりもできますし、もっと豊かな社会になるのではないかなと思いました。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。皆様から感じられたことございませんか。

教育委員 村川 一恵

人間関係を浴びせたいとおっしゃられたように、確かになるほどと思ったのですが、子どもは自分の個性がどうなのかということを説明もできないし、気づきもしないものだと思いますけれども、沢山の大人がどういう仕事をしているのかとか、色んな人に会うことで、この人は僕に似てて、こういう仕事をしているんだとか、もしくは僕はこういう人になりたいけど、こういう人がやっているんだ、じゃあ僕にもなれるかもしれない、そういうので自分の内面に向き合うことが自然と無意識的に出来てくると思うので、沢山の人の会わせるといのは学校だけではなくて、地域のおじちゃんおばちゃん知り合いだったり、そういう人達をつてでたくさん色んな人を呼んだりとかできるし、例えば松原の寺子屋塾では、意識的にやっていることですね。今年は市長に来ていただいて話していただいて、珍しい音楽家の人に来ていただいたり、消防士さんだったり、とにかく豊かな人材を集めて講師をしていただいています。もうちょっとうまいこと広がらないかな、モデルにならないかなと思いつつやっています。

先ほど、市長が言われていたアクティブラーニングですが、これって今すごく雑誌やネットとか教育関係の資料に載っているのですが、実はすごくシンプルなことだと思っていて、家庭でもできるし先生達もできることだと思うのですが、そのシンプルなことを今実践されようとしているモデルがあるので、それを見届けたいなと思っています。朝の授業で子ども達に何か1つのものだったり、美術品だったり1つのことについて考えさせる時間をこの10分とかで考えさせる。それについて、子ども達がいかに考えてどう解決するかということを考えて発表をするということを習慣づけるという。まず考える習慣を付ける。そして発表する力を付ける。そこで一番重要なのは、先生達が大人の道理で導かないということ。手法はあると思うけども、先生が求めるような作文の書き方だとか、そういうものではなくて、子どもが自分の言葉で話せるような習慣をつけて、それを磨いていくというものを短い時間の中でやっていくという取組があつているので、その様子を見ながら、それがうまくいけばぐっと広がると思います。そういう例を私達も注視していきながら展開できればなと思ったりしました。

大人が待つということですね。子どもが話をするのを待つという、そういう習慣を設けるというのがあるようです。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。他、皆様からないでしょうか。

教育委員 江口 真由美

私も、もっと子どもの時に色んなことを体験して色んな人に出会っていたら、ああいうことしなかったなと、こういう年になってから本当に思います。たとえば、ここらへんではちょっと難しい、福岡辺りに行けば観れるようなミュージカルだったりとか、「ああ、あんなふうになりたいな」とか、「そういうものに関わるような仕事をしたかった」とか、そこから見える仕事というのは沢山あ

ると思います。だから、家庭で体験とかそういうのをいっぱいさせてあげたらいいのではないかと思います。

それと、地域でも、私は佐世保出身で、よさこい祭りに子どもが出たのでずっと追っかけをしていました。そこで肌で感じるものが大きかったですね。今まで何で佐世保でそんなお祭りを、19年前から始まったのですが、おくんちだったのにヨサコイなんかもってきて、というところが地元の人間としてはあつたのですが、なんかすごく感動して、地域のお祭りって謂れがあつたりとかそういうものに関係なく、新しくできあがつたものに対しても受け入れていけば、何か見えてくるものがあるんだな、というのを肌で実感して、そこで子ども達とか私達大人もそうですが、触れるものの息づかいとか、触れるもので感動したら私達でも何かやれるのではないかな、とかいうことを感じました。そういう体験を一杯させてあげたいなということと、地域で言えば、もちろん高齢者は今からすごく増えてくると思います。そこを活用しない手はない。けれども、ちょっと上の先輩とか知っているお兄ちゃんお姉ちゃんとかがあんなお仕事についたとか、あんな学校に行ったということを手近に感じれたり、話を聞けたりするのはすごく親近感があつて、現実味が増すのではないかなと思います。よくテレビで「ようこそ先輩」とかあるのですが、本当にちょっと上の先輩の話と一緒に聞けたりとかする機会があればいいんじゃないかなとすごく思います。

あと、アクティブラーニングについても、主体的に動くってどういうことなんだろうと、大人の私達でも、ややもすると言われたことばかりになってしまう。これを子ども達に実践させるということは、それ相当の教師や保護者も覚悟とか、自分達も学ばなくてはいけないことがあると思っています。日頃からの訓練とかすごく大事になってきて、一番大切になるのは本当に基本は挨拶なんだろうと、目と目を見た挨拶で、そこからコ

コミュニケーション、今はネットとかで簡単に人とつながるので何か勘違いしているところがあるような気がして、そこを人と人がぶつかり合う訓練とか、それを恐れない子に育てて欲しいなと思います。そこで作り上げる喜びとか、共有するとか色々な感情を抱きながらも進んでいく力強さというのは子どもに必要ではないかなと思います。そう考えると学校現場で時間の余裕があって、ちょっとした行事を仕組んだりとか、自分たちで作上げるものがあるといいなと思います。その中で自分の役割とか、自分が必要とされていると思うと、自分からやってみようとか、そういった中でこんなふうになればいいとか、方法論とか手段とか、それをするために必要な力ってなんだろうというのを自分で学ぶのではないかなと思います。

あと、家庭の協力なのですが、基本は学級懇談会はすごく有効じゃないかなと思います。先生と腹を割って話をするのは、永田先生もおっしゃいましたが、目標を共有することと、家庭ですること学校ですることの棲み分けをしっかりと。家庭はこれをちゃんとやっておこう、先生の為にもやっておこうと。先生もそれをやってくれたら私達はこれを頑張るという棲み分けをちゃんと出来ていればいいのかな、と子ども達は安心して学べるのかな、と思います。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。佐古委員が先ほど危機管理の面でちょっと感じたことがありますとおっしゃっていましたが、何かありましたらお願いします。

教育委員 佐古 順子

地域の教育で、放課後子ども教室とかはすごくいいなと思っています。学校とかで読み聞かせをしていた時にも、学校の中に入るといいことではあるけれども、学校側としては危機管理について大変ではないかなと思っていました。誰でも来ていいわけではありませなし、何かあった場合には先生方はクラスを見ていらっしゃる、

誰が学校の中に入っている人を管理するのか、ということも必要になってくるでしょうし、良い面と悪い面が、悪い面というのはおかしいですが、またそこに一つ考えなくてはいけない事が出てくるのではないかな、と考えておりました。

公民館で退職校長先生が夏休み授業をしてくださるからと、子ども達を集めたのですが、とても集まりが悪くて、とても申し訳ないことしたことがありました。社会体育の試合があるとか、体育館の都合で今日はバスケットの子が来ない、明日はバレーの子が来ない、次はドッジボールの子が来ないということになって、本当に申し訳ないことがありました。

公民館の利用を地域を超えて近隣の公民館に行くとか、先生方も公民館の活用も本当にちゃんとあっているかどうかということも耳にして、あのときは親が連れて行かなくてもいい距離で、心配なく通える範囲でということで、夏休みにそういう交流の場を作ろうとしましたが、上手くいきませんでした。町内の畑を借りて、子ども達に夏休みに畑と公民館でさせようとしたのですが、やはり自分たちの力でみんなをするのは難しかったので、若い親の世代ではなくて、退職校長先生とか地域の人達とするということでも良かったのかなと反省しております。

それと、危なくない範囲でという考えがありましたので、狭い範囲で考えましたけれども、もう少し地域を広げれば良かったのかなという反省はありました。

それから、キャリアサポートの話がありましたけれども、中学校では職場体験とかの授業があったりしているので、そこで先生達がいろんな職業のことを教えたりなさっています。この仕事をするためには何をどんな試験を受けなくてはいけないかという本を図書館で見せてもらったのですが、やはり今まで社会の職業がどんどん変わっていくといいますが、たとえばあるホテルではフロント係の人もいなくなって、ロボットだったり。宅急

便も無人の車が移動したり。世の中も変わってきていますので、色々な方のお話を聞くということと、変わっていても耐えられるような何か前向きな姿勢というか、永田先生が裾が広げれば高さができるとおっしゃったということに、ああ、そうだなと感じました。国語力とか人に説明する力とか、人の前に立って話す力とかそういう力が必要なのではないかなと思います。

今文部省も英語教育のアップというところにも力を入れているみたいですが、先日も何でケネディ大使が来ているのかなと思ったら、全国の高校を回っていらっしゃる。アメリカに留学するようなお話をなさっていましたけれども、大学入試のために留学を諦めるという日本の教育制度をもうちょっと違う方向にするために、全国を回られるということがいかに重要なのか。私達も考えを変えなくてはいけないのではないかなということ、ケネディさんが東高校に来られたと聞いた時にとっても感じました。日本企業の中でも全館英語が共通語の所もありますし、FAXやメールも一瞬のうちに世界各地に行けますので、英語をどのように身につけていったらいいのか、ただ覚えるのではなく、日本語って思考回路が出来ていないとちゃんと文章にできないでしょうから、きちんと考えなくてはいけないかな、と思います。

個性を伸ばすということも、先ほど中学校職場体験でもありましたけれども、それを小学校までおろした方がいいのか。色々なキャリアサポートに関して、中学校から私立でというのは上を目指してる方でしょうから、その方達は自分の将来を見越して何かを考えておられるのでしょから、そういうサポートも先生達も大変ではないかなと思います。授業もしなくてはいけない、授業時数が少なくなっている。一つずつ先生と学校、色々な物を共有しながら、私達もお勉強して考えていかななくてはいけないかな、と思っております。

大村市長 園田 裕史

Thank you very much. 英語は私も全くしゃべれ

ないのですが、今、佐古委員からあったところは大事だなと思いました。

今、皆様から意見を聞かせていただいて、本当にありがたいなと思って、勇気づけられました。私は自分のマニフェストの中にも地域教育を日本一にしようとしているのですが、確かな学力とずっと言われ続けてきていて、文部科学省も当然それを言っているという中で、確かな学力というのは曖昧ですよ。実際、「何なんだ」とよく思いますし、今皆様からご意見を聞かせていただいて、大村市が目指す「確かな学力」というのは、方向性が共有できているんだろうなと改めて再確認ができて、皆様が今おっしゃられていた1つに、地域と家庭の力を集結させようじゃないかということであると思います。そして、そのポテンシャルというか、その取組が大村市はとても進んでいると本当に思っていて、だから絶対やれるんだと思っています。大村市独自の「確かな学力」を皆でつくろうではないかと思っていますし、ずっとメッセージも発してきたので、ぜひ具体的に取組を進めていければと今日改めて思いました。皆様が今おっしゃったことについては、議事録にもありますし、教育委員会、こども政策課のメンバーも1つの柱というものが地域というところに非常に集約されるのではないかなと思いました。それがアクティブラーニングであったり、職業選択であったり、生きる力といったところにつながってくると思いましたので、地域教育という柱と高齢者の方の活用というか、高齢者の方にお力をお借りして、生き生きとしていただきいと、Win-Winでいけたらいいんじゃないかなと思います。

永田先生をはじめ、退職校長会の方が中央小学校を開校してされていて、それを正直もっともっと拡大をしたいなと思っています。簡単にはいかないことだと思うのですが、退職校長ではない方々の力を借りれないかなと。

この前たまたま、退職公務員連盟というところに挨拶に行きました。県の。そこに所属をされて

いる方というのは、実は先生方が多くて「最近、市役所の職員も県庁の職員もあんまり入ってくれない。」と嘆かれていましたが、でも、います。県庁マンも行政マンも消防も自衛隊もいます。だから、たとえば公務員に限らずいいんですが、退職校長会以外の方々にご協力をいただくという形では、その中でもそういう生きがいを作っていこうという話が出ていましたし、活用、連携できないかなと思います。

もう一つは、これは永田先生から、厳しいというかすごく的を得ている「公民館が社会教育の場になっているのか」という指摘がありましたけれども、今公民館連合会という組織を仕切られている団体があります。ここも実際にそのことを非常に危惧されていて、公民館をその地域の寺子屋だったり、拠点にしたいんだということで自分達でプランをわざわざ作られています。その会長にもご協力いただいて、公民館をそういう形で地域の拠点として活用していければ、僕らも財源的なところも含めて色んなお手伝いができるのではないかなと思いますので、1つそこで地域教育という場を沢山作っていききたいなと思います。

ただ、1つは放課後子ども教室を充実させたいと思っています。これはちょっと行き過ぎかもしれませんが、実は学童の場所という学童保育のニーズが高すぎて、学童が満員状態です。この前ご相談に来られた時に、子供会の加入率も低くなっているしな、と考えた時に、でもよくよく考えると地域にある学童保育というのは子ども会みたいなものだと思って、学童保育を現代版の子ども会だと考えれば、もっと可能性が学童にはあると思ったので、学童保育と放課後子ども教室の中で有識者である先生方や色々なスキルを持たれている大人が関わっていくと、学童というものがもっともっと充実していくものになっていくと思うので、こういったことに取り組んで学ぶ意味を教えるとか、皆様からいただいたように沢山の大人に語っていただきたい、自分になりたいものを知

る、地域を巻き込んでという取組、ここにつながっていくと思います。例えば、寺子屋塾、今回松原の寺子屋塾って地域創生大賞という全国の47の代表に、松原が県内で選ばれていますので、多分グランプリを取ってくれるものと信じていますけれども、寺子屋塾もああいう建物でやるから面白かったりしますので、そういう場に公民館になるといいなと思います。お寺とか神社とかそういうところもそういう意味があったりしてもいいのかなと思ったりします。

それと江口委員からあったPTAの話ですが、これもさっき言った学童じゃないけど、子ども会加入率が低いと言われるからこそ、PTAに関わってくれるお母さんというのは本当に熱心なんです。学校の役員になってくれるのだったら、もうちょっと地域のことも協力してくれたらいいのかなと思うところがちょっとだけあって、江口さんは僕の先輩なのですが、江口さんみたいな素敵な人は学校のPTAもしゃかりきで地域のこともしゃかりやっておられました。ちょっとだけ地域のことも皆さんがキーパーソンになってくれると助かるんですよ、と言っているんですね。ここに若いお母さん達を巻き込むと地域と協力できないかなと思ったりするし、僕ら若い世代の親は、絶対自分の人生、僕らの世代も人生が豊かになったり、気づきがあったり、面白かったり、その影響が子どもにもあったりと思うので、それをお母さん達が気づいてくれると、お母さん達も熱心に動いてくれると思うので、そんな仕掛けを教育委員会と一緒に考えていければな、と思いました。

ただ、それをするためには佐古委員が言われた学校を開放する場合の危機管理の面とリスクはしっかりリスクマネジメントもやらないといけないと思いますので、今日、本当に皆様のご意見を聞かせていただいて、大村市が目指す「確かな学力」というものがこういうものなのだという、「確かな学力」って学力だけじゃなくて・・・というよう

なホワっとした感じじゃなくて、「ここなんだ」というものを皆様と一緒に詰めていって、そこに対してやっていく。

また、学級懇談会への参加率が低い、これもPTAに私もメッセージとして発信していきたいなと思います。本当、そうなんですよね。あれもおかしくて、おかしいと思ったら怒られますけど、自分の子どもの授業参観の風景は見たいから途中で早退して来たりして来ます。仕事の間に仕事の制服で来るんです。でも懇談会時には帰っている。少ないときだと1人か2人くらいしか懇談会に残らない。これおかしくないですかと言って、子どもが手を挙げる姿だけを見に行ってもしょうがないとまでは言いませんが、仕事が忙しい方ももちろんいるのでそうではないが、大事なのはその後残っていただいて自分の子どもがどういう状況なのかという意見交換するところこそが、せっかく仕事を早退して来るところにつながると思うので、そのメッセージは出していってお父さん方、お母さん方に理解していただければなと思いました。

そういうことで、大村市独自のというか、大村市はこれなんだという「確かな学力」を創造していきたいと思いますので、ぜひ、私自身も皆さんから今日頂いたご意見を色んなところで、ありがたいことにご挨拶させていただく場があるので、そこで直接保護者世代に伝えていきたいと思います。ちなみに、地区別ミーティングというのを市役所の幹部が全員行って、各地域で懇談を重ねてきましたが、今度ですね、昨日ちょっとネーミングを決めたのですが、「まちのこトーク」というまちのことをいろんな人と話そうという、新しい僕が出張で色んな方と話すということを積極的にやっていこうと思っていて、第1回がPTAの保護者の方という形で今進めています。そういう地区別ミーティングみたいな広い範囲ではなく、小さい範囲で忌憚のない意見を聴いて意見交換するところ、出張していこうと思っているので、

その場でもお伝えして、大事なのは、高齢者の方もそうですし、お母さん方もそうですが、力を貸してほしいという言い方だと思うのですが、皆でやろうという形でメッセージを発していきたいと思います。ですので、ぜひ今日皆様からいただいたご意見を、本当に参考になりましたので、ちょっとそこをこの総合教育会議の中で、議事録を僕も読んで調べていきたいと思います。

もう一点だけ皆様からご意見をいただきたいのは、次の「こころの教育の充実」というところにもつながると思うのですが、さっきのところの皆様方にもう一件ご意見をいただきたいのが、21校回った時に、支援を要するお子様、要は発達障害であったりという子ども達に対して、先生方も本当に力を注いでいただいて、今PTという補助の先生も含めて協力をいただいております。発達障害と言っても色んなお子様がいらっしゃいますし、私も見てきたところがあります。大事なのは、周りの子ども達とかの関わり、反応とか、環境とか、声掛けとか、ということで随分子どもが変わってきていて、3年生4年生5年生ぐらいになると、1年生の時と随分変わって来たりしています。

多様性とかダイバーシティとかよく言われていますけれども、その部分を認め合うということで、その辺もまた子どもの成長につながると思っています。この前のみんなの学校という映画はそんな映画だったのですが、そこらへんでぜひまた皆様からご意見いただければと思っています。発達障害、特別支援をする、これは身体も心もという部分で言うと、どんな視点に注意して取り組んでいく方がよりいいのか、効果的なのか、自分はこんなことを思うということでもいいので、ご意見をいただきたいと思うのですが、渡邊先生お願いできますでしょうか。経験に基づく話でもいいのですが。

教育委員 渡邊 敬

確かに発達障害とか増えている感じがします。

今注目されているからとか、今まで分かってなかったのが分かってきたとかあると思いますが、色んな分類をされて発達障害の子どもが増えているというのは確かだと思います。問題はその子ども達をどうするかだと思いますが、実際、外来で臨床していて来られます。一番関係あるのは、心因性のような障がいを持っている、聴力障害とかいう形で出てくるのですが、よく聞いてみたら学校の中で適応ができない、不登校で学校に行ったらほとんど保健室にいる、そういう子どもがいたり。

大村市長 園田 裕史

身体症状として出ているということですね。

教育委員 渡邊 敬

はい、そうです。よく聞いたらそういうことだというのが結構あります。そういった専門家のコンサルティングを受けるということも大事でしょうし、学校で周りが援助を図っていくということも大事だと思いますけども、やはりそういうことが目にはついていきます。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。他にありませんか。

教育委員 佐古 順子

グリーゾーンといいますか、クラスでは30人に対して先生がお1人、支援を要する人に対しては数名に対して先生が1人とか、1人に対して1人とかいらっしゃいますが、やはり子ども達は構われない、一番見てもらいたいという気持ちがすごく強い時があると思います。寂しい時とか、何か悩んだ時とか。それを乗り越える為にじゃないですが、先日見学した学校では、全教員がそれを共有されて、「あ、なんとかちゃんは今日はちょっとしけるとよ」とか、「今日は元気だよ」というのを先生同士の会話でなさっているというのを聞いて、やはりチーム力ってすごいなと感じました。

子どもって、自分を見てほしい、兄弟の人は赤ちゃんが生まれたら上の子がちょっとおかしくなるというのを感じて、やはり認めてもらいたいとか、自分を構ってもらいたいとかいう気持ちが出

てくと思うのですが、それが授業の中でペア学習のような授業があったりとか、子ども同士が関わるような授業が見受けられました。そういうのもいいなと感じましたし、恥ずかしがらずにじゃないですが、机の上に分からない子はイエローカードを置いて、先生から別に説明いただくとか、分かった子はグリーンカードにするとか。やはり細かいことの積み重ねかなと思います。家庭内の教育では、自分でもすごく反省するのですが、1人じゃやっぱりできない、周りの方とか色んな方に助けられて学んでいくんだな、成長していくんだなというのを感じました。

大村市長 園田 裕史

はい。ありがとうございます。

教育委員 村川 一恵

小学校の現場にいて思うことなのですが、やはりちょっと学校になじめないとか、問題を起こしてしまうという、特にお医者さんに何も言われていなくてもそういう意味で苦しい思いをしている子どもとか、お父さんお母さんがすごく多くなってきていて、それをやはり周りの保護者から「ちょっとおかしいんじゃない。」と聞いて、また更につらい思いをするという状況もよく見ます。できるだけ早い段階で若干の支援を要するということが必要かどうかというのを、小学校に上がる前とか保育園にいる時の小さい段階で、早い時に気づける方法があればいいなと思っています。3歳児検診とか入学時前健診とかあるのですが、もうちょっと踏み込んだカウンセリングだったり、そういうところで早い段階で子どもさんの支援でどういう支援が必要かというのを見つけていく必要がある時代なんだなと思います。

そして、それに関わる大人や同級生の子ども達ですが、私は小学校の時に中央小学校だったので、特別支援学級があって、重度の発達障害の同級生がいて、私達は常に彼のサポートをできるように、自然な流れでできるように、その時の発達支援の先生だった松崎鈴子先生が作って下さっ

ていました。その時はすごく先生から怒られていて、担任でもないのにすごく怒られてあまり好きではなかったのですが、その学級の先生に就かれて、すごく当たり前私達が手伝うことをサポートして下さい、それが自然だよ、ということをお教へ下さったり、その学年が終わった時に「本当にありがとうございます。」と褒められた時に、それまでは「当たり前でやることだよ。」と教へてもらっていて、「本当にあなたがいたから助かった。」と後から言ってもらった時に、自分も認められた気になったし、たぶん私にはその時の何かは今も残っているのではないかなと思うのですけれども、そういう支援を必要とする子に接することが当たり前ということが、そういう導き方が必要なんだろうなと思っています。

大村市長 園田 裕史

はい。ありがとうございます。江口委員お願いします。

教育委員 江口 真由美

私は、まずは子どもより大人だと思うんです。大人の私達が日頃からたとえばママどうしでマウンティングするとか、差別の芽というか、そういうものがあること自体がまずいなと思っています。日頃から他者を認めると言いますが、それは大変難しいことではあるのですが、それが自然と出来たら良いなと思っています。

でも、子どもって本当は実はそういうことを思っていない。発達障害の子とかへの近づき方とか、仲良くなり方というのは実は子どもの方がよく知っていて、うまい距離感で接して友達になっていく。そこに大人のそういう目が入ってくる。そこでおかしくなったりということもあったりします。絶対にそういうことは、自分のプラスにもなるし、一緒に成長していけるということで、必ずその友達と共に成長できたら、プラスなんだっていうのを大人が身をもって感じていただけないかなというのを思っています、一方で行政でもできることはおっしゃったように早期に見つける手立てと

いうのを構築しなきゃいけないということと、高校生とか大学生や妊婦さんとか、今から子どもを産んで育てる人達にどういうものかとか、正しい知識とか、そういうことを教へていくという取組をされはじめています。そういうのが広がっていけばいいなと思います。

お父さん、お母さんもそうなのですが、おじいちゃん、おばあちゃんの理解というのはすごく大事だと思うので、そこを正しい知識を持って、困り感を一緒に払拭させてあげたいな、というのを行政の方でもしていただきたいし、同じ母親としても保護者としてもそういう目で子どもと接していければいいなと思います。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。永田委員お願いします。

教育委員 永田 政信

時間もあまりないので、簡単に言います。大事なことは、1つは、学校をあげて、先ほど授業と言いましたが、そこをあげての取組が大事かなと思います。全員で情報を共有すること、顔を知ること、名前を知ること、そんなところが大事だと思います。

2つめは様々な実践を先生方がされております。その実践を共有する事というのは大事だと思います。昨日も、子どもに携われていた先生が、この子は聴覚優位の子ではなくて、視覚優位の子なんですよと言われました。だからそういった経験を沢山先生達は持っておられる。そういったことを全部で学ぶ機会を作るということは大事かなと思います。

それから、毎日子どもと触れ合っている担任の先生、その学級経営の中でやはり人権の視点を必ず入れるということが大事かなと思います。そして子ども達に接する視点が違ってくると思います。以上です。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。溝江教育長お願いします。

教育長 溝江 宏俊

発達障害が今ありますけれども、各クラスに数名と言われている状況です。先ほど渡辺先生がおっしゃられたことも1つあると思いますが、昔は「あれはおかしかと。」と言われたと思うのですね。それがずっとこうなってきたと。周りもそういう形で見るようになってきたと。そういう中で子ども達は周りと接して自分が成長する、それをフォローして教員が見てやる、というのが1つですので、将来的にはやはり一緒に授業をさせていくというのが一番だと思うのですが、発達障害にも軽度・重度があって、重度の人が一人おれば学級崩壊になってしまうんですね。いかに指導力がある教員でも、御しがたい子どもがいるとですね。そうなった場合、やはり分けるというか、保護者の了解もいるのですが、分けてその子に応じた特別学級で授業を行う。それをシビアにやっていくというのも1つの学校の役目ではないかなと思います。それはちゃんと保護者に話して、この子はもしよければ特別支援をと。そういった制度的なものちゃんと家庭に理解してもらえるような体制も大事だと思います。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。ご承知のとおり、今大村小学校の通級に加えて、一昨年から竹松小学校が加わり、中学校が郡中学校だけだったものが、玖島中学校が去年の4月から加わっています。これは教育委員会の皆様のこれまでのご議論があるということが聞こえてきて、以前と比較すると充実をしてきたと思いますが、まだまだ今皆様からご意見をいただいたことへの取組、あとは、ハードの拠点として、今の拠点でちゃんと網羅できているかということもありますので、その部分は今年度しっかりと玖島中学校が取り組んでおりますので、そこを見ながらまた今後の展開につなげていきたいと思っています。

それから、第2期大村市教育基本計画の中で掲げている幼児教育から中学校までの幼保小中の連

携というところも今しっかりと教育委員会含めて、いろんな施策に結びつけていきたいと思っておりますので、そういったところも今後ご議論いただくことになっていくかと思います。そこら辺で何か教育委員会から補足がありますか。ないですか。大丈夫ですね。今詰めています。しっかりと。ですので、よろしくをお願いします。

少し時間がオーバーいたしました。本当に今日はありがとうございました。正直、「確かな学力」と言われてきた中で「何なんだ」というところが正直私もありました。「確かな学力」ってよく聞くけど、「実際何なんだろう」というところがありました。大村市の教育委員の皆様が考えている方向と、これまでやってきていることと、私が考えていることが本当に同じ方向を向いていることと、そういった取組が大村市にはこれまで自然発生的にあった部分と、今からやろうとする部分が確実にありますので、その部分をしっかりと大村市独自のものとして作り上げていって、大村市の子ども達が本当の意味で「確かな学力」をしっかりと付けていけるように、教育委員会と一緒にまた協議をして施策を作り上げていきたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。本当に今日は勉強になりました。ありがとうございます。

では、マイクをお返しいたします。

市長公室長 大槻 隆

皆様、どうもありがとうございました。次第の5番「その他」でございますが、次回の総合教育会議ですが、11月9日の夕方4時から市役所2階の大会議室での開催を予定しておりますが、いかがでしょうか？

次回のテーマ等については、本日の会議を踏まえ検討した上でまた改めて皆様にご連絡させていただきたいと思っております。

以上で終了となりますが、皆様方から何かございますか。どうぞ。

教育長 溝江 宏俊

総合教育会議の前に教育委員会を開いたのですが、委員の方がテーマを早く教えてくれという苦情が出ておりますので、できれば早めにテーマを教えてください。よろしくお願いいたします。

市長公室長 大槻 隆

はい。事務局の作業が遅くてご迷惑をおかけしました。申し訳ございませんでした。他にないようでしたら、これをもちまして平成 28 年度第 2 回総合教育会議を終了いたします。本日は誠にありがとうございました。